

2017年春に「流域アカデミア」が開講。 「水源から海底まで」の流域活性を目指す。



photographs by Yusuke Abe
text by Kentaro Matsui



東京大学名誉教授の養老孟司さん(右)と、東京海洋大学教授の刑部真弘さん(左)。



山梨県・道志村の「養老の森」。スギ・ヒノキの植林地に広葉樹を植え、整備している。

8月27日、山梨県・道志村で「流域アカデミア」の特別セミナーが開催された。東京大学名誉教授の養老孟司さんが会長を務める『水資源保全協議会』と、東京海洋大学教授の刑部真弘さんが理事長を務める『ブルーカーボン研究連携機構』の共催。「流域アカデミア」とは、流域を軸にした地域活性、環境保全、エネルギー問題に取り組む場と、そこに集まる人々のネットワークをつくるプロジェクト。水源地をフィールドに活動する『水資源保全協議会』と、海をフィールドにする『ブルーカーボン研究連携機構』が協力することで、「水源か

ら海底まで」を活動の範囲に広げる。

特別セミナーでは、「森と海めぐる水」をテーマに養老さんと刑部さんが対談。刑部さんが、「植物が吸収しているCO₂量は約12パーセント、海の吸収は約30パーセント。その海が吸収するCO₂をブルーカーボンと言います。沿岸部での吸収を支えているのは森。森から流れる栄養分で海藻類が育ち、CO₂を吸収するのです」と、森と海のつながりを語ると、養老さんは、「森のことを知りたいなら、自分の目で森を見るべき。生態系という言葉がありますが、全貌を見た人は誰もいません。わかったつもりにな

っているだけ」と指摘した。

また、刑部さんは会場の周りの森を見渡しながら、「植物は光合成にいちばん強い緑色の波長の光は使わず反射しています。緑の光を有効に使うとすれば、葉は黒色であるはず。なぜ植物は緑色の波長を使わないのでしょうか」と疑問を呈すと、養老さんはユニークな喩えで答えた。「西洋の競りは最高値をつけた人に落札されますが、昔の日本の骨董の競りは違い、配られたお椀に値を書いて出すと、座頭が最高値と最安値を外し、残ったお椀を宙に投げ、裏向きに落ちたお椀の主が落札するという仕組

み。参加者は落札者と個人的に交渉することもできました。最高値と最安値を弾くことで、骨董の相場を安定させ、多くの客が買えるようにするためだとか。知恵があると思いませんか?」「植物が緑の波長を弾くのと似ていますね」と刑部さんは、現代人もそうした仕組みに学ぶべきだと語った。

そんな、自然の仕組みに沿った生活に立ち戻り、流域の環境を保全しながら産業を盛り上げようという「流域アカデミア」。そのための人材を育成する講座を来春開講する予定だ。任期満了後の地域おこし協力隊の活躍の場としても活用したいと考えている。



①「流域アカデミア」の特別セミナーの様子。②養老さんと刑部さんが対談。森と海のつながりや楽しさについて語り合った。③森の奥にある道志川の源流の一つ。神奈川県へ向かって流れていく。④『水資源保全協議会』理事の横山斗南さん。⑤東京海洋大学准教授の川名優孝さんが司会とコーディネーターを務めた。

水資源保全協議会
www.wrcc.jp.net
ブルーカーボン
研究連携機構
www.bluecarbon.or.jp